

学生のやる気を支えるもの

—台湾と香港の大学を訪ねて—



荻原 哲*

Structural Diversity in Society that Supports Motivation of Undergraduate Students: Examples from Two East Asian Countries

Key Words: Student motivation, Hong Kong, Taiwan, Cultural background, Course evaluation

普段講義などで接する学生達のやる気のなさにため息をついてばかりいられない。仕事・観光ででかけて行くアジアの国々で元気な青年達に出会ると、どうもここには日本と異なった社会的背景があるらしいと思い始めた。出来たらそれが何であるのか知ること、ため息をストップさせたいと願うようになった。学生のやる気motivationが出来たら日本に持ち帰りたいと思った。ここで述べるように台湾と香港の大学を訪ね、学生のやる気がどこから来るのかという問に対して、2つの非常に異なった回答を得た。

特色GPの活動の一環として調査旅行をした。特色GPは文部科学省の推進する教育予算プロジェクトである。GPの意味するところはgood practiceであり、よい教育活動をしている大学・学部を選び、他大学の模範となって欲しいというたくらみである。大阪大学理学部の「進化する理学教育」が特色GPに選ばれたが、内容は初年度専門教育を中心とするカリキュラムデザイン特に理系の基礎科目の定食化(全て必修科目)である。理系の基礎を将来の専門とは別にきちんと学んで欲しいという教員からの気持ちの表れである。教員が本気になってるのだから、

学生のやる気に無関心ではられない。

今回訪問した大学は台湾(中華民国)の国立成功大学と香港の香港科学技術大学である。台湾国立成功大学は台南市にある大規模な総合大学であり、台湾の大学の中でもトップランクに位置する。台南市は、台湾の西南に位置する都市。人口は約75万人。台湾で最も早くから開けた地区の一つであり、一時期台湾の首府であり、政治・経済・文化の中心地であった。一方、香港は人口700万人。狭い面積に人がひしめき合うように住んでいる。香港科学技術大学はその雑踏を逃れた、九龍半島の東のはずれにある科学技術とビジネススクールを中心とした単科大学ではないが比較的小規模、建学されて間もない大学である。

台湾国立成功大学

学生たちのやる気のみなもとがどこにあるか、そもそもその前に学生にやる気があることが私の幻想でないということを知りたくて、国立成功大学でのトーク集会を理学部生命科学科・学科長にお願いしてアレンジしてもらった。4-5人が集まるのかと予想していたが、生命科学科2年生と3年生の全員120名が集合していた。いくつかの私からの質問に一人一人手を挙げて答えてもらった。まず驚いたのが英語の能力とさらにそれを越える自己表現能力である。1時間半程度の時間をかけてゆっくり話し合ったが、その中からなるほどと思えることを紹介したい。motivationを支えるものは何かという私の質問への学生からの答えは、次のようなものである。彼らの表現を私なりに解釈したものであることをお断りしておきます。



* Satoshi OGIHARA
1948年2月生
大阪大学大学院・理学研究科・博士課程修了
現在、大阪大学大学院・理学研究科・
生物科学専攻、教授、理学博士、細胞生物学
TEL 06-6850-5811
FAX 06-6850-5817
E-Mail ogihara@bio.sci.osaka-u.ac.jp



図1 台湾国立成功大学でのトーク集會に集まってくれた学生達。ともかく元気がよい。

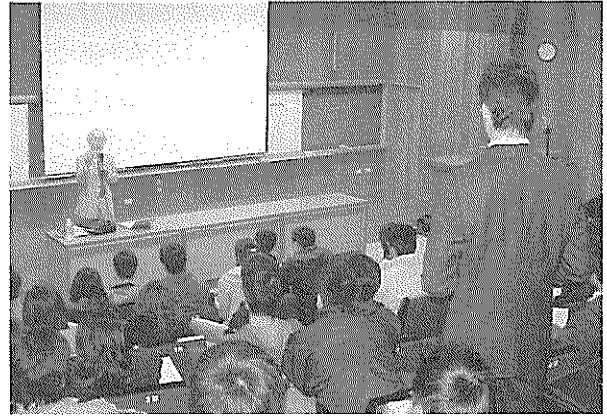


図2 自分の考えをずばずば英語で述べる。私とちょうちょうはっしの議論が平気で出来る学生達。

1. 大学の集合的意志 Collective will of the university

ある学生はキャンパスが綺麗だから勉強する気になるといふ。ある学生はいま自分が特別な場所にいるという思いがあるので頑張るといふ。ある学生は先生たちが熱心に授業をし、夜遅くまで研究している、その姿をみて自分も頑張りたいといふ。ある学生は大学の設備の良さ(図書館、完備した寮、大学院生寮、夫婦寮、保育所など)ゆえに勉強する気になるといふ。異口同音に学生たちは私に説明しようと努めてくれた。いったいこれはどういうことかじっと考えて答えが出た。大学全体がこぞって「あなたの勉学を支援しますよ」というメッセージを送っているのである。これは大学の集合的意志 Collective Willとも言えるものである。

2. 家族、中国人社会 Chinese family and society

学生からも教員からも同じような答えをもらった。中国人社会は社会的地位を重んずる。学士、修士、博士いずれも高く評価される。子供の時から良くできる子は何でも一番になれるという両親からのメッセージを常に受け取るようだ。社会や両親から激励がほしい全体 Self-motivation かどうか疑問に思うこともある、時にはそれがプレッシャーになると正直に答えてくれた学生もいた。

3. 良質な高校教育 High school quality

日本人の学生に「高校教育のなかでなにか良い思い出を持ってますか」と訪ねると100人のうち手を挙げるのは2-3人である。高校時代に教員(おとな)とよい関係を結ばないままに大学へ入学してくる。

こういう学生を料理するのは難事である。同じ質問を台湾の学生にしてみた。120人中、100人以上の学生が手を挙げた。どんな思い出?と聞くと一人の学生が手を挙げた。「私の高校の生物の先生は私の友人でもあるのです」といふ。一瞬耳を疑った、何度聞き直しても同じ答えが返ってきた。まるで友人のように接してくれる先生から学問への興味の目が開かされたということが分かった。意欲を支えるものという意味で高校から大学教育への滑らかな連結がここにある。

以上の三点がトーク集會で会った学生からの多くの意見、私の大きな驚きと感動と嫉妬を反映するものである。そのほかにも、自分の国は小さな国だからお互いに助け合わなければならない、という意識が学生にあり、何かにつけて助け合っている、という意見もあった。また大学のカリキュラムにも大きな工夫が見られ、一例を挙げると国立大学間に学生の学力コンテストが行われていること、学生の成績は全て公開(印刷物が配布され、さらに掲示される)されていることに驚いた。また初年度の英語教育の最終試験を卒業直前に行うなどの工夫、単位以外に TOEFL、コンピュータリテラシの国家試験などの点数を卒業要件としていることが強く印象に残った。

香港科学技術大学

同じ質問を抱えて香港に出かけていった。教員と学生と別々に面談した。まず理学部生化学科・学科長にストレートに質問をぶつけてみた。学生の motivation を支えるものは何ですか? その質問以上に

明解な回答が彼女の口から返ってきて実にびっくりした。「学生のやる気を支えるものは授業評価です」。その後調査したことも含めて多少詳しく紹介しよう。香港科学技術大学理学部生化学科の授業評価システムは、コースを改善していくための次の三つの委員会によって運営されている。レビュー委員会、カリキュラム管理・教育クオリティー委員会、学生・教員混成委員会。これらの委員会はそれぞれ約一ヶ月半に一回委員会を開催する。構成メンバーは前二者が教員5-7名からなるのに対して、学生・教員混成委員会は教員6名に対して7名の学生代表を含む。学生代表にはTA代表、大学院学生代表も含む。それぞれの委員会は構成員に重複があり、委員会間で情報が滑らかに流れる。コース評価の質問項目はウェブサイト公開されており、学生は学期末にオンラインで質問に答える。学生からの評価票の結果は学生を含む委員会によって厳選され委員会に持ち込まれる。議論の結果、改善が要望されるコース担当教員は学科長あるいは委員会委員長と口頭で議論をする。その結果の学科からの勧告は委員会で、口頭と文書で教員に伝えられる。驚くべきリベラリズムとプラグマティズムがここにある。自分たちがただただ授業評価票に答えるだけでなく、改善の過程に参加し、意見が直ちに授業に反映される、それが学生のやる気を引き出していることが想像に難くない。

このようなシステムがいずれの学科にも存在し同様に運営されている。更に学科の上位にある学部、さらに上位の大学にも同様な委員会が存在し、より広い視点からカリキュラムの問題に取り組んでいる。生化学科の事務室には授業評価票のコンテストとも言えるグラフが掲示されていた。同じ理学部の学科間で数値を争っているのである。年次を追った統計データが紹介され、生化学科で言えば次第に上がっ

ていくスコアが強調されていた。

次に学生たちにインタビューした。私を待っていてくれたのは4名の生化学科の学生。香港人と中国本土からの学生が半々であった。英語力、自己表現力、Motivationはいずれも高いものの、やる気についてはそれぞれの学生の出身地によって「質的」にかなり異なっていることが話しているうちに分かった。香港生まれの学生達は世界が必ずしも大学の中だけに留まらない。話題も関心も地球で起こっている出来事に及ぶ。学部を卒業後どのような道を歩きたいか、大学院に進学して研究者への道も考えるかという質問には、かなり否定的な答えが返ってきた。それに較べて中国本土からの学生は本土の大学教育にかなり批判的であるが故に香港にやってくるという事情も反映してか、大学を舞台にキャリアを積んでいく意志が感じられた。

私たちのいる場所

さて日本に帰ってきて日本の大学事情に再び思いを巡らす。このごろはドロップアウトする学生が少なくなった分、ひたすらこなすだけ、という学生が増えている。その姿勢に能動性の片鱗も感じる事が出来ずに授業をしていくことはかなりの苦痛を伴う。ただもう一度台湾と香港の事情を考えてみると、学生の持つやる気が純粋にSelf-Motivationとはいえない。そうではなくて大学や社会が上手に学生達からやる気を引き出している。形こそ違え、香港科学技術大学の授業評価システムは運営も含めて、やはり大学が学生に示しているCollective Willである。そう言う意味では日本の大学(おとな)がCollective Willの形成あるいは提示に失敗していると考えられるべきであろう。

